

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生5・6年の部 最優秀賞

お母さんと二人三脚

広陽小学校六年

木津^{きづ}

帆乃香^{ほのか}

私は毎年、ピティナピアノコンペティションに参加しています。このコンクールは、三月の初めに課題曲が発表されて、バロック、クラシック、ロマン、近現代と四つの時代の作曲家の曲を演奏しなければなりません。予選、本選、全国大会と進めば八月のお盆明けまで続く長期コンクールです。まず、予選はその中から二曲演奏します。近現代は必ず予選で演奏する事が決められているので、あと一曲、どの時代の曲にするか迷っていました。私はそんな時、必ずお母さんに相談します。お母さんは、ピアノ経験者で、私にとっても心強い助っ人です。

「ねー。お母さん。あと一曲どれにすれば良いと思う？」
するとお母さんは、

「んーそうやねー。やっぱりバロックがいいんじゃない？ 帆乃香にこの曲合つてると思うけどなあ。」

とアドバイスしてくれます。私の事をよく知りつくしているお母さんの助言は的確で、私は練習してみても、

「やっぱりこの曲好きかもしれない。この曲にするわー。」
となり、練習を開始しました。

毎年出ているコンクールではあるけれど、今年は特別な思いがありました。来年は中学生。運動部に入って、そちらもがんばりたいと思っています。

ピアノと部活動の両立は、なかなか大変だと兄を見て分かっているつもりです。このコンクールが最後になるかもしれない。出るからには、絶対良い成績が残せるようにがんばろう。そのためには、友達と遊ぶのもしばらくがまん。とにかくピアノ練習優先で過ごしていく事に決めました。学校から帰ってきて、夕飯前に一時間、その後夕食、入浴を済ませて一時間、二時間練習しました。時間がある限り、お母さんも横に付いて練習を見てくれました。自分では、一生けん命やっているつもりでも、お母さんからダメ出しをいっぱいされて、とっても腹が立ったけれど、私のために言ってくれている、と思ったらくやしいけれど直そうと

努力しました。ただ、そんな簡単に直るものではありませんでした。どれだけががんばって練習してもお母さんの思う様には弾けなくて、私自身も自信がなくなり、お母さんも、どの様にすれば私が弾ける様になるのか困惑している様でした。私はお母さんに、

「お母さん、一生けん命教えてくれとるのに弾けなくてごめんね。」
と謝りました。するとお母さんは、号泣して、

「お母さんもういっぱい注意したり、おこったりしてごめんね。帆乃香が一生けん命弾いてくれたらそれでいいよ。」

と言ってくれました。私は、そうお母さんに言ってもらえたけど、
「絶対、予選通過するぞ！」
と密かに心に決めました。

そして、五月末に迎えた予選当日、私はきんちようし過ぎて体が震え、とてつもなく速く弾き過ぎ、自分でも訳が分からない内に弾き終えてしまいました。あれだけ、色んな事をがまんして沢山練習してきたのに……。結果は見るまでもありませんでした。私はショックで落ちこみ、この何か月間の練習の事を思いうかべました。どうしてこんなになんばつてきたのに、上手く弾けなかったのだろうか。きんちようするのはみんな同じ。しかも、初めてのコンクールでもないのになぜだろう。するとお母さんが言いました。

「帆乃香は、結果の事ばかり気にしてたんじゃない？ だからきんちようし過ぎたんやと思うよ。今まで一生けん命練習してきたんやし、審査員の先生、楽しんで演奏するのでどうぞ聴いてください、って気持ちなら良い演奏出来たと思うな。」と。確かにお母さんの言う通りかもしれないと思えました。終わった直後は、きんちよう感から解放されて、ホッとした気持ちの方が強かったけれど、何だか心の中がモヤモヤしていました。実はこのコンクールは二回受けられるチャンスがあって、私はもう一回チャレンジしてみたいのだとお母さんに伝えました。今度は、今回の様な失敗をくり返さないように、絶対に納得のいく演奏をしたいと

心に決めました。次の予選までお母さんと今まで以上に念入りに練習し、完成度も上げて、本番はよゆうを持って演奏する事ができました。私はどんな結果が出ても自分の納得のいく演奏ができてとても満足していました。ホームページで結果発表があり、私の名前を発見したとき、とてもうれしかったです。でも、次の本選がせまっていてそこからの一か月は本当に大変でした。二曲を仕上げるために、夏休み返上で朝から晩までピアノを弾き続けました。お母さんもほぼ毎日横に付いてくれて、家事をする時間も私に割いて練習を見てくれました。折角もらったチャンスなので、何とか入賞できるくらい仕上げてがんばりたいと思い、自分が弾いた曲を録音し、お母さんと客観的にどこがダメだったのかどこをどう直せばいいかをふり返り、調整していききました。コンクール直前にはホールを借り、音のひびきや強弱などを確認しました。そして、ついに本選の日を迎えた私は、無事に練習の成果を発揮することができました。私は充実感でいっぱいでした。予選と同じく、ホームページでの結果発表。スクロールしていくと、そこには私の名前がありました。

「あつたー！私の名前のつとるー！やったー！ありがとう！お母さんのお陰やわ！」

つと言うと、お母さんが

「お母さん、何もしてないよ。帆乃香ががんばった結果や。」
つとayingてくれました。

私とお母さんは、二人、笑って抱き合いました。

